

シリーズ



上宮王家の悲劇

その1 王陵の谷、磯長

副会頭 野瀬泰良
「輝くなにわ」編集委員長
(靈園経営者)

3世紀末の崇神天皇が日本の四道に將軍を派遣され、隅々に朝廷の威光を示されたのは、神武天皇に次ぐ二度目の建国と言えるだろう。しかし我が國が中華帝国を核とする東アジア国際社会から、社会制度も文化も、その進化において対等なる国家だと認められるには、さらに350年以上も後に飛鳥の都に勃発する「大化の革新」のクーデターを待たねばならなかった。それまでは地方豪族の完全なる私有の下にあって職業別集団としての部民(べみん)か、奴婢(ぬひ奴隸)にしか過ぎなかった人民も、以後は誰のものでもない公民(国民)の地位を得るという国家的規模の一大人権制度の改革であった。このような大改革はクーデターの首謀者によって発想されたものと考えるより、往時最も国際情勢に明るかった斑鳩の上宮(しょうぐう)王家、初代当主の聖徳太子や、二代目当主、山背大兄(やましろのおおえ)皇子によって古くから温められてきたものと考える方が自然であろう。今回のシリーズは、我国を国際社会の一員にするために、律令国家への改革を企てながら、遂にその実現を見る直前に、抵抗勢力によって抹殺された上宮王家の悲劇を扱ってみよう。

聖徳太子ゆかりの天皇陵が集中する「王陵の谷」

近鉄長野線喜志駅(富田林市)から車で石川を渡って東に走り続けると、やがて道は国道166号線、即ち古墳(河内王朝)時代の天皇家を支えた南河内の丹比(たじひ)や誓田(ほむた)と、新しく日本の中心地となりつつあった飛鳥(あすか)地方とを結ぶ「竹内街道」に合流する。太子町内に入って二上山南麓の竹内峠を目指して登りにかかるころ、聖徳太子の御廟で有名な觀福寺の山門にさしかかる。さらに坂道を登って信号を右折し、住宅の中を突き抜けると、斜面もなく、ゆったりとした谷間を埋める水田の中に、敏達(びたつ)、用命、推古、孝德などの飛鳥時代の諸天皇の墳墓が散在するため、別名「王陵の谷」とも言われる磯長(しなが)谷に入る。史跡散策のハイキングコースとして有名な地域である。

さて、なぜ天皇陵が平野部にではなく、このような人目に付かない僻地に集められたのだろう。いずれの古墳も外堀はなく、大王墓の象徴であった前方後円墳の形状もなしてはいけない。この夏、NHKが制作した番組を見ていると、往時、即ち6世紀の後半から7世紀初頭にかけての大王陵を意図してこのような僻地に集めたのは聖徳太子だ、とあった。NHKの説明では、太子がそれまでの大規模な天皇陵の築造をこれ以上続けることに反対され、終止符を打たれたのだそうである。今日的に言うなら、国税を使うだけ使って高速道路建設という公共工事を続けて



王陵の谷磯長

きた政と官に、太子は「待った」の号令をかけた歴史的な改革者だったことになる。確かに今日の人間の目から見れば磯長は山深い僻地に違いない。しかし飛鳥時代の人々にとってもそうだったのであろうか。否そうではなく、磯長は往時の皇室・皇族を支えた蘇我氏に縁が深い地であったので天皇陵が集中した、とする説もある。

いずれにせよ長年月の歳月と膨大な数の人民を使役して、大規模な天皇陵が造られることは、聖徳太子の時代以降ぱたりとなくなつた。皇族以外の豪族たちも巨大墳墓を造ることはなくなつて行くのである。太子が天皇陵や豪族たちの墓の規模を政策的に小規模になされたのかもしれないが、太子の時代に



NO IMAGE

日本国民の埋葬理念そのものを変える歴史的背景にこそ目を向けるべきではなかろうか。やはり最もそれに強く影響したのは、人間の輪廻転生を主張する仏教という宗教の国民的普及であろう。そして仏教の布教に最も熱心で、最もそれに貢献なされたのも聖徳太子その人であり、そしてもう一人は太子にとって心強いサポーターでありながら、また油断ならない政敵でもあった、大臣(おおおみ 総理大臣)蘇我馬子(そがのうまこ)であった。



用明天皇陵

25代で途絶えた大倭の天皇家

さて古代の日本において臣(おみ)は、世襲もされる役職であったが、神武天皇の建国に従ったという意味の、天皇の譜代の証である連(むらじ)の家柄も代々続いているものであった。連に選ばれた一族の中で、次第に頭角を現すのは、神武天皇の「伴」をして北九州から付いてきた久米の軍勢の子孫、大伴(おおとも)氏であった。大伴氏は後に連の中では筆頭者となり、最盛期を迎えるのは大伴金村が一族の長であった時代、即ち西暦500年前後の頃である。

金村が連の筆頭者を自認していた頃、大倭(おおやまと)王権には前代未聞の危機が訪れた。25代武烈天皇が崩御なさると、天皇の継承者が途絶えたのである。国内では無敵の実力者であった金村は、今日で言うなら短時日にして森内閣を作った自民党の野中氏や青木氏のように、キングメーカーの辣腕を発揮し、よく知られる第16代、仁徳天皇の父君である応神天皇5世の孫を自称する、近江に生まれ越前を彷徨していた無名の豪族の長を、いきなり大倭王家の継承者としたのだ。それが今も高槻付近でその陵墓の比定地論争が続く、第26代継体天皇である。時に西暦507年。

ここで神武天皇の後継者として大倭の豪族たちから選ばれたのは、神武帝について九州からやってきて建国戦争に戦功があつたタギシミミの皇子ではなく、大和三輪山の神を祀る出雲王家から神武帝に嫁がれた皇后がお生みになったヌナカワミミの皇子であった、というシリーズ前回のエピソードを思い出そう。このことは古代社会が、父親が誰だというよりも、誰の胎(はら)から生まれたのかが優先される母系制社会であったことを意味する。

歴史学者の中には、古事記や日本書紀に表された皇室の系譜について、少なくとも応神帝即位のところと継体帝即位のところの二箇所で、万世一系とは言い辛い不連續面があると主張する向きもある。応神帝は北九州に生まれ、母親とともに大陸様式の騎馬軍団を率いて畿内に攻め上がった天皇だと伝えられている。そのような主張は遙か昔から儒教の教えとともに、すっかり父系制社会に慣れてしまつて母系制社会を観念的にしか理解できない現代人の考え方違いではなかろうか。

それは何も現代人に限らない。古事記、日本書紀を編纂した奈良時代の官僚たちも、我々と同様、母系制社会は既に理解できなくなつた社会通念だったと想像できるのだ。例えば今日英国の元首はエリザベス女王だが、それを千年後の歴史学者が、エジンバラ公を英国の国王として誤って記述してしまう、…これと似たようなことが記紀の編纂にも崇神記以前の記述ではあつたかもしれない。そこに記紀の皇統の記述が、古代中国の歴史書の記述と矛盾し、歴史学者に大切に扱われなかつた理由がある。しかしながら日本の古代社会が母系制であったという観点で古代の大王家の系譜を見直すならば、それは間違いなく連綿と続く万世一系の皇統には違いないのである。



推古天皇陵



NO IMAGE

欽明帝の治世から飛鳥時代が始まる

では大伴金村が強引に即位させた繼体帝の世はその後どうなったのだろうか。やっぱり大倭の豪族たちはなかなか繼体を大王(天皇)とは、認めなかつた節があり、ために帝はなかなか大和に入れず、北摂や北河内に長くおられたようだ。しかも繼体帝を推挙した金村も、朝鮮半島南岸の倭人に所縁が深い任那(みまな)の国が隣国に侵され、滅亡するに及んで、その外交政策失敗の責任をとつて失脚した。

代わって連の筆頭の地位を得るのは物部(もののべ)氏である。神武天皇による建国戦争の時、天皇に攻められる親族を見限つて官軍に馳せ参じた登彌(とみ)のウマシマジという男がいた。物部氏は彼の子孫であり、大王家から官軍の指揮と石上(いそのかみ)の武器庫の管理を任されるほど信頼が篤く、また大和川流域の交易を掌握することで、一族は大いに繁栄し、やがては大連の地位も得た。

さて大倭の豪族たちが繼体帝を認めるに至つたのは、帝が遂に大倭大王家の皇女を皇后として迎えられることになったからである。お二人の間にお生まれになつたのが後の欽明天皇で

あり、この頃から飛鳥時代が始まつたのは欽明帝の治世、538年である。

欽明帝のお子様たちの中で、5名の方が天皇もしくは皇后になられた。お一人は敏達(びだつ)帝、そして用命帝、即ち聖徳太子の父君である。もう一人は皇女様で、最初敏達帝の皇后となられたが、後に推古帝として即位なされた。記紀の記述では日本最初の女帝である。そしてもう一人も皇女様で用命帝の皇后となられ、聖徳太子をお生みになつた。まだ他にお子様はいらっしゃつたが、さらにもう一人は蘇我馬子にお命を奪われる崇俊帝である。

聖徳太子自身が磯長の谷に天皇陵をお集めになつたとするなら、それは敏達、用命、推古の三帝の御陵であろう。それらは即ち、太子には伯父、父親、叔母の墓ということになる。推古帝の御陵の前から西の河内平野を見渡せば、落日に染まつた空が美しかつた。

(次週予告)上宮王家の悲劇②仏教公認への戦い



NO IMAGE